

緒方富雄先生を偲んで

大塚 恭 男

緒方富雄先生の訃報に接して学生時代の恩師がまたお一人亡くなられた淋しい思いをした。緒方先生は、小川鼎三先生や田坂定孝先生と同じ大正十五年の東大医学部卒のクラスであられた。学生時代は質問を避ける意味で、なるべく先生と

視線を合わせないようにつとめていたが、卒業して十年以上もたつと年齢差も相対的にせばまってきて、親しくお言葉を賜われるようになってきた。このような意味で緒方先生と「再会」したのは昭和四十年代になってからのことである。

昭和四十一年に西ドイツ・オーストリーの留学から帰ってきた私は、滞欧中に関心をもった西洋本草との関連で医学史・薬学史の領域に入っていた。帰国後すぐ日本医史学会に入れていただき、さらに蘭学資料研究会にも出席するようになった。

その頃の医史学会の会長は小川鼎三先生で、蘭研の会長は緒方富雄先生だった。いずれも毎月一回例会があって、私はほとんど毎回出席し、時には発表する機会も与えていただいた。緒方先生も両学会にほとんど毎回出席されておられ、私の稚拙な発表に対しても質問をしてくださったのはありがたかった。緒方先生は、昭和のはじめに日本医史学会が学会としての体裁を整えて、役員をおいた時には、二十代の若さで理事



緒方富雄先生

に就任され、以来一貫して学会の発展に尽力されてきた。その主なテーマは緒方洪庵と適塾、そしてその背景にある日本洋学史であったことは周知の通りである。

私にとって忘れられない思い出の一つは、昭和四十四年に緒方先生を団長とする学術視察団が組織された折に、その一員に加えていただき三〇名ほどで訪欧した時のことである。その時の最大のイベントは、ライデン大学で行われた「日蘭学術交流史に関するシンポジウム」であったが、それにもましてありがたかったのは洋学史の權威の諸先生を識る機会を与えられたことだった。私は故石原明先生とともにしばしば脱線して緒方先生をお悩ませしたが、それらもいまはなつかしい思い出となっている。

昭和四十九年八月には三笠宮崇仁親王を総裁とし、緒方先生を会長として「洋学二百年記念会」が東京三越本店で行われた。皇太子殿下並びに妃殿下の行啓を仰ぐなどのこともあって緒方先生がたいへんに緊張されておられた姿がいまも眼に浮かぶ。

いつも先生にお願いする一方だった私が、一度だけ先生からものをたのまれたことがあった。先生は昭和四十五年九月の医史学会の例会で「緒方洪庵『適々齋藥室膠柱方』と『解剖略式』」と題する発表をされた。このうち私にとくに興味があったのは、前者すなわち『膠柱方』の方だったが、これには天保九年（一八三八）十二月の日付のある洪庵の自序があることから、洪庵が一通りの修学を卒えて大阪に開塾した年の著作であることがわかる。

当時、幕末の洋学史、とくに薬物のそれについて関心があったため、先生に何か質問したのかも知れない。会がひけてから、緒方先生よりこの処方集について調べてくれないかとの言葉をいただいた。そこで、私なりに調べて、その結果を学会誌の一九卷二号に出していただいた。緒方先生は文末に身にあまるおほめの言葉をあとがきとして書きそえてくださった。

考えてみると、この数年間は先生にお目にかかることもなくうちすぎたように思われる。気にはなっていたが、お見舞

いにあがるのも憚られているうちに永遠のお別れをしなければならぬことになってしまった。

先生の御遺志について日本医史学会のいっそうの隆盛・発展のために微力を尽くすことをお誓い申しあげてお別れの言葉とする。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所)

緒方富雄先生の格言

川島 恂 二

昭和三十八年四月私は蘭研初陣で杉田信、成卿(せいけい)のヒポクラテス像画讚と古河河(こが)口家との関係を発表してから、緒方富雄先生と話させていただけの身となれた。昭和三十九年八月には、河(かわ)口信(しんた)任宅に杉田玄白の弟子河(かわ)口信順が、師よりいただいた「医事不如自然」(縦書、横書二点)と他三点の幅とマクリがあることがわかった。緒方富雄先生、小川鼎三先生も医事不レ如ニ自然一の格言をすごく喜んで下さった。

その頃、石原明先生が私に「緒方先生だけは絶対に色紙も何もいっさい書かぬ主義だが、この医事不如自然がすごく御満悦だから、この機に川島さん、色紙に書いてくれるように頼みなさいよ。そして二枚書いて一枚は是非石原明に上げてくれと頼むんだよ、あんた」と肩を叩いた。

それで私はさっそく実行したところ、簡単に「そうだ。まさに僕はあの格言は気に入っているんだ。君には近々書いて上げよう。家に取りに来たまえ」と簡単に引受けて下さった。しかし百日たっても音沙汰なし。